

山口西田讀書会プロトコル

Jun. 27. 2020 奈原伸雄 記

I 前回(6月20日)講読内容の整理：西田幾多郎『働くものから見るものへ』表現作用 三 145頁6行~147頁8行

「すべて働くものは時に於いて働く⁽¹⁾」から始まる一節は時間論であり、しかも「人間の」、そして他ならぬ「西田の時間論」である。最初の「働くもの」とは、端的には自己の「自覚」のことであるが、文脈からは、それが「直観も、反省も、絶対自由意志さえ」も動員して、空間的静態と時間的動態とを生み出す根源的な創造力であることを覗わせる。「時は即ち力でなければならぬ⁽²⁾」、「この不可解のものこそ自然をして働くものたらしめる⁽³⁾」等々の記述はそれを裏付ける。

以上はいわば時間の生起に関わる「根源的価値」であるが、次にその発展過程にも価値があることが語られる。いわゆる時の経過が「無目的的⁽⁴⁾」で「無内容⁽⁵⁾」及び「無始無終⁽⁶⁾」にして「無限なる系列⁽⁷⁾」であるような「機械的な運動」であっても、それが「高次的なる直観の世界に結合する時⁽⁸⁾」、その過程がそのまま自己実現につながるような境地に達する。また、そこは「永遠の現在⁽⁹⁾」という絶対的の矛盾がせめぎ合う危うい「場所」であり、「今この現在」に「永遠の現在・過去・未来」が畳み込まれているような「自覚」が促される。これは、いわば「エネルギー(活動)」が「純粹経験」を享受する「純粹時間」である。

さらに、次節では、カント哲学を積極的に活用して時間を合目的・有機的に統一する「建設的立場」が強調される。「無目的的と考えられる機械的自然の世界といえども、それが働く世界である限り⁽¹⁰⁾」……「時の積極的内容が見られ、所謂合目的因果の世界が成立する⁽¹¹⁾」。従って、「純粹統覚⁽¹²⁾」により「形式時の統一⁽¹³⁾」(理論理性)を図り、その上で、「実践我⁽¹⁴⁾」(実践理性)及び「反省的判断力による自然の合目的的見方⁽¹⁵⁾」(判断力)を十全に活用し、自己の根源的創造力によって「種々なる有機的統一⁽¹⁶⁾」を果たすと同時に、その成果としての「意志の内容⁽¹⁷⁾」を生物生命の模範として示すべきことが要請される。ここで「意志の内容」とは、「具體時⁽¹⁸⁾」にもたらされる「有機的統一⁽¹⁹⁾」であり、「エネルギー(活動)」における実存的熱情さえ感じさせる。

II 哲学的問い：われわれはどうして‘難しいテキスト’を読むのか？

西田讀書會へは途中から参加したため、つつい聞きそびれているのだが、先生は、どうしてこんなにも難しいテキストを使われるのか？西田がかつて止宿した部屋で、西田の後期論文を講読する——この厳しくも恵まれた条件に与れるのは、われわれ門外の素人筋が過半を占める。一家言を吐く命知らずは見事に的を外し、控えめな愛読者は絶え入るように囁く、「哲学とは海外旅行に行ったようなものではないかしら？」、その心は、「だって、時々日本語が聞こえるんですもの」。すると、それを裏付けるように、障子の向こうから、藪から棒に甲高い声が聞こえた(ような気がする)。曰く、これは「日本語では書かれて居らず、勿論世界語でも書かれてゐないといふ奇怪なシステム⁽²⁰⁾」であると……。声の主は、むろん小林秀雄しかいない(『學者と官僚』)。西田は西田で、山口のことを「山の中にて随分つまらぬ所」と貶めたようだが、それに劣らず、小林も批評家とはいえ、到底後戻りのできない極めつけの捨て台詞を吐いたものである。

両者が抱える「無頼と一徹」は、性格は異なってもそれぞれの頑固さにおいて敵同士ではない。それを明かす「状況証拠」はなくても、例えば次の「表現」のような「直接証拠」は少なくない。いずれ先達の西田に、小林が「回帰」しても不自然ではなかったはずである。

まるで心理が映されているというより、隆々たる筋肉の動きが写されている様な感じがする。事実、そうに違いないのである。このあたりの文章からは、太陽の光と人間と馬の汗とが感じられる、そんなものは少しも書いてないが。(小林秀雄『平家物語』)⁽²¹⁾

実に冴え冴えとした迫真の鏡である。「鏡」とは、いうまでもなく、向う側に対面してやっ
と自己を視認するような、幼い者のための道具ではない。こちらから対象をつかんで、文体
という像を結ぶ成熟した自意識の「今の私の装い」である。西田の言う「実在の真景⁽²²⁾」とは、
正しくこのような「表現」によつて的を射るのではなからうか。この思想は、『善の研究』序
の「個人あって経験あるにあらず、経験あって個人あるのである⁽²³⁾」という、いわば「純粹経
験宣言」にも呼応する。

鮮やかに浮かび上がった文章をはっきりたどった。……僕は、ただある充ち足りた時間
があった事を思い出しているだけだ。自分が生きている証拠だけが充満し、その一つ一つが
はっきりとわかっているような時間が。(小林秀雄『無常といふ事』)⁽²⁴⁾

小林の珠玉の名言は、西田が述べた「実地上真の善とはただ一つあるのみである。すなわ
ち真の自己を知るといふに尽きている⁽²⁵⁾」という言葉、すなわち「哲学」の目的と一致する。

以下、大幅に私見で補うことになるが、元々フランス文学専攻であった小林は、やがてベル
クソンに傾倒し、その「文學性⁽²⁶⁾」に加え徹底した「科學性⁽²⁶⁾」に着目し、当時猖獗を極め
た現代物理学をはじめ最先端の科学を涉獵せんと憧れ出るが、結局は足をすくわれる。当人
にしては珍しく「失敗⁽²⁷⁾」を認める一方、わが国の学者達の独善に対しては、「本当に健全な
無遠慮な読者を持っていない⁽²⁸⁾」と批判を浴びせつつ、いずれ前掲のような日本文化に沈潜
した達意の「名文」に所を得る。それが「達意」といわれる所以は、実のところ、小林は自意識
の中の〈X〉、つまり「今の私」を捉えるのに徹頭徹尾腐心していたからである。

彼は、大人になっても、母の死後家の近くで蛍が一匹飛んでいるのを見て、「おっかさん
は、今蛍になつてゐる⁽²⁹⁾」と信じる「幼兒的神秘性」(「或る童話的経験」⁽³⁰⁾)を抱えていた。そ
の上で、その科学性との乖離を束ねて統一しようという「野蛮な合理性」も持っていた。彼の
文体を形づくる陰影に富んだ逆説も、早くから老成したような論理の飛躍も、核心に近づく
と決まっていたゆとう曖昧さも、さらには大戦前から戦中にかけて犯した戦局の「誤認」も、そ
れを世間並みに反省しないのも、「一つたん言葉を、生まましい経験のうちに解消し、其
処から、新たな言葉を発明する⁽³¹⁾」、自意識の「野」という戦場における、言ってみれば真の「純
粋経験」とその「表現」との切羽詰まる戦いの戦渦であり、かつ戦果であった。

後期論文の「奇怪なシステム」の難所に差し掛かると、先生は決まって『善の研究』を紐解
かれる。その闊達な朗読に聞き入ると、龍福寺の梵鐘を衝く撞木の息遣いさえ伝わって来る。

《引 用》

- I 前回(6/20)講読内容の整理：西田幾多郎『西田幾多郎全集(旧版)第四卷』(岩波書店) 働くものから見るものへ 表現作用 三
(1)145頁6行、(2)145頁13~14行、(3)145頁15行、(4)146頁3行、(5)145頁6行、(6)145頁9行、(7)145頁7行、
(8)145頁8行、(9)145頁10行、(10)146頁5行、(11)146頁11行、(12)147頁4行、(13)147頁4行、(14)147頁4行、
(15)147頁5行、(16)147頁5~6行、(17)147頁6行、(18)147頁6行、(19)147頁7行
- II 哲学的問い：われわれはどうして‘難しいテキスト’を読むのか？
- (20)小林秀雄『小林秀雄全集 第六巻』學者と官僚 162頁13~14行(1950.12.25創元社)
- (21)小林秀雄『日本の文学43 小林秀雄』平家物語 248頁下段14~18行(1968.6.1中央公論社)
- (22)西田幾多郎『善の研究』第二編 実在 第三章 実在の真景(全注釈 小坂国繼) 155頁9行(2013.11.7講談社)
- (23)西田幾多郎『善の研究』序(全注釈 小坂国繼) 16頁4行(2013.11.7講談社)
- (24)小林秀雄『日本の文学43 小林秀雄』無常ということ 244頁上段21…下段3行~6行(1968.6.1中央公論社)
- (25)西田幾多郎『善の研究』第三編 善 第十三章 完全なる善行(全注釈 小坂国繼) 374頁12~13行(2013.11.7講談社)
- (26)小林秀雄『小林秀雄全集 別巻I』感想 四 39頁2行(2002.6.10新潮社)
- (27)小林秀雄『小林秀雄全集 別巻I』感想 緒言 5行(2002.6.10新潮社)
- (28)小林秀雄『小林秀雄全集 第六巻』學者と官僚 160頁17行(1950.12.25創元社)
- (29)小林秀雄『小林秀雄全集 別巻I』感想 一 12頁3行(2002.6.10新潮社)
- (30)小林秀雄『小林秀雄全集 別巻I』感想 一 11頁11行(2002.6.10新潮社)
- (31)小林秀雄『小林秀雄全集 別巻I』感想 二 20頁5~6行(2002.6.10新潮社)